
東方英雄伝

一覚流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方英雄伝

【Nコード】

N8223Y

【作者名】

一覚流

【あらすじ】

仮面ライダー・・・それは人々の笑顔と全ての生命を守る者・・・
仮面ライダー・・・それは選ばれた「英雄」になる正義の証・・・
仮面ライダー・・・それは世界を破滅にも平和にも導ける力・・・
これは全く関係ない平凡な中学3年生が迷い込んだ世界の話である。この話は「東方」、「仮面ライダー」、「その他アニメ」の二次創作です。キャラ崩壊なんて振り切れる人のみご覧ください。そしてこの話の主人公は中3とは思えないことをするかもしれませんが、are you ok? (一覚流は

なろうの流れ星愚者様となろう以外のとある1人によって構成されています。なので流れ星愚者様やその他1名様のブログ・HPなどにも投稿されている可能性があります。転載が確認されましたら確認いたしますのでコメント等でご連絡ください。）

覚醒

おれは東方が好きだ。仮面ライダーも好きだ。その他アニメも良く見ている

そして俺は1つ夢があった。それは幻想卿に入る・・・つまり「幻想入り」したい。と思っていた。

そんな綱渡りのように不安定な感情を持ちつつ学校の帰り。

蛸が風情良く鳴くのはもはや夏であって夏ではないと思う。「夏」と言うのは油蝉が鬱陶しく鳴くのが

夏と言うものだ俺は信じている。だが今日、俺は変なものを拾った。

赤いリボン、普通の人から見れば「そんな物どこにでもある」と言われると思うが、

なぜか俺はその赤いリボンに興味と言うかなぜか惹かれるものがあったからだ。

どこかで見たことがある。どこかで・・・考えてると自分の家に着いてしまった。俺は玄関前の階段を上がろうと思った。

しかしそれは叶わず俺は2段の階段から足を滑らせて見事に空中一回転。そのまま頭を地面に打ち付けた。

こうして俺の意識は段々と遠のいていった・・・。

夢が覚めると、そこは雑木林だった。ってあれ？俺こんなところに居たっけ？それにあの夢は・・・？

って！そんなことはどうでもいい！（？）ここはどこだっ！こんな雑木林おれは行ったことが・・・ハッ！？

この感じ、そしてこのノリ・・・まさか！夢の！「幻・想・入・り」！

「幻想入りキターーーーーーッッ！」

今までの俺の心の叫びは何なんだっだろう。俺のこの時のテンションはMAXまで上がった。

フワフワした丸い毛玉のようなものが目の前を通り過ぎていった。ソレが俺の幻想入りの予想を確実なものにした。

そして俺はポケットから携帯電話を取り出した。そして東方、つまり幻想卿の地図を見つけ、それを見た

「えっと・・・ここから一番近い所は・・・香霖堂か・・・やれやれ。」俺は『一番最初に会うのが男かよ・・・』

と思いつつ歩を進めた。

歩いてそう経たないうちに香霖堂についた。途中妙に殺気や気持ち悪くなる森を通ったがそれ以外は特に無かった。

俺は香霖堂のドアを2回ノックした。「すいませーん、誰か居ますかー」何かギャグ的なことやろうと思ったのは

俺とみんなの内緒である。すると扉を開けるとともに中から男がきた。その男こそが森近 霖之助であった。

「・・・見ない顔だね・・・。」霖之助は見慣れないものを見るような目つきで俺を見ていた。

俺は今まで起きたことを事細かに霖之助に言った。

彼は目を見開くように驚いていた。俺は信じてはもらえるだろうか？とは思っていたが、

案外納得してくれたようだ。「なるほどそんな理由だったのか。」
と一人で納得するほどだからだ。

「では君もここに迷い込んだと言うわけか。」霖之助は続けて「
その手の問題は八雲 紫に今は聞いたほうが良い。」

俺は霊夢はどうしたと言ったがは霖之助は少し戸惑った表情を見
せて言った。

「今、霊夢は僕の所はおるか魔理沙の所にも、博麗神社にも居な
い。」そのとき俺は右手側にあったアタツシユケースに

視線をそらして驚愕した「霖之助サン……。これは……。」「

「ああそれはね、無縁塚に落ちていたんだ。」と霖之助はまるで山
手線を全部暗記した子供のように

話し始めた……。

無縁塚むえんづか魔法の森を抜け「再思の道さいしのみち」を進ん
だ先にある木々に囲まれた小さな行き止まりの空間にある

無縁仏のための墓地。結界の綻びがある結界の交点になっている
ため、冥界や三途の川とも繋がることがあり、

また外の世界の物が落ちてくることも多い。妖怪桜である「紫の
桜」があるのもここである。

とどっかのウィキペディアをそのまま言ったように話してくれた。

まあ俺はそんなことは知っていたが

俺が気になるのはそのアタツシユケースの中身だ。そのアタツシ
ユケースに俺は見覚えがあった。

たしかあれは……。何だっけ？

「ああ、そういえば、僕にはこのアタツシユケースの開け方が分
からないんだが、君は外の人間だろ？」

「霖之助サン、アタツシユケースには鍵があるんですよ……。」「
とは言いつつも俺はそのアタツシユケースを

開けようと試みた。するとなぜかいとも簡単に開いていった……

。

何故かと悩む間も無く、俺の疑問と言うか引っかかりは確信に、そして驚愕になっていた。

「仮面・・・ライダー・・・クウガ・・・」おれの呟きに霖之助は急にハツとした表情になった。

「そういえばもうひとつ変なものがあつた・・・！」霖之助の台詞も終わらずに俺に続く2人目の来店。

しかしどう見ても来店のご様子ではなかった。

「あれはっ！」俺はこれから起きる事、いや、やる事がカッチリと決まったように感じた。

仮面ライダークウガ第一話に出てきたクモ男、その怪人、もといグロンギはきつと俺たちを殺して

クウガのベルトを奪うつもりなのだろう。そう思った瞬間俺はとっさの行動に出た。

ベルトの入ったアタッシュケースを持って店内を迅速に出た。

まあ当然グロンギも追っかけてくるのだが、そのまま俺は走った。

追われるのは分かっていたそして追いつかれるのも分かっていた。しかし俺は走り続けた。

「クソッ！」何故かは単純、開けた場所に行く為だ。こいつと戦う方法は一つしかない！

ふと開けた所に出た。俺は息を切らしてアタッシュケースからクウガのベルト、アークルを着けて

戦うしかない。俺は決心をした。あのグロンギがこっちに來るのが森を通ってくる。その間に

アークルを着ける！俺はアークルを腰に着けた。直後この世の物とは思えない痛みが俺を襲った。

「がはあ・・・・・・が・・・あ・・・・・・」言葉にならない痛みを耐え切って俺は立ち上がった。

直後俺の腕に白い糸、いや縄がつけられていた。

「！」驚く間も無くその縄に引つ張られて上空に飛ばされて地面に激突した。

そして痛がつている間にグロンギは歩を進めてくる。俺は思った【死ぬ・・・！このままじゃ、死ぬ！】すると体に少し力が宿った気がした、動く！俺は迷わずグロンギに生涯のなかで渾身の拳を繰り出した！

「ググッ！？」グロンギは驚いたようにこつちを見た俺は気にせずそのまま蹴りかかった。

すると段々俺の身体に純白の鎧、仮面ライダークウガグロイングフォームになった！

正直勝てる見込みは少なかった。しかし1%でも勝率があるなら俺は戦う！

とか誰かが言っていた。まあそのまま死ぬより少しでも生き残れるならそっちの方が良い。

そう思ったただけだ。

「だあ！」俺はボクシングの物真似で鋭いショートアッパーを繰り出した。

「ググウ！？」グロンギは少し怯んだ様子だがダメージは少ない。だが俺はその隙を見逃さないように

心掛けていた！まずは左ジャブを二発、その後ストレートを一発、いくらグロイングフォームだからと言って、

少しは身体能力は上がっている筈、ならば！と思い、俺は思い切り地面を蹴って飛び上がった。2mぐらいは飛ぶはず

と思ったが大体1mぐらいかな？

そのままグロンギの肩に踵落としを食らわせた！

「やつ・・・やったか！？」俺は壮絶に立ち込める土煙を見ていた。

「倒してはいなくてもダメージはある筈だ！この隙に逃げたほうが良いな・・・。」俺は来た道に戻ろうとした

しかしその行動は叶わなかった。右足首にグロンギが出した糸が付いていた

「!？」疑問に思う間もなく俺は地面に叩き付けられた。

「グハッ！」運が悪く俺は地面に顎を叩きつけられてしまう。目眩がして吐きそうになる。

ヨロヨロと木を支えにして立ち上がるがグロンギの方が実戦経験は2枚も3枚も上手だったのか

俺をグロンギが出した糸で木と俺を接着した。

『忘れてたッ！こいつクモのグロンギだった！』俺は心の中で激しく後悔した。やばい。この状況は

かなりまずい。この考えをしている間にもグロンギは迫ってくる。そして俺の首に右手をかけた。

ヤバイ！と思った瞬間。ガトリングの轟音と共にグロンギの右手が干切れとんだ。

「!？」俺はすかさずグロンギに右足で蹴り飛ばした。

そのグロンギは状況を飲み込めていない様子であった。慌てた様子で森の方に逃げていった。

「待てッ・・・！」俺はグロンギを追いかけようとしたが願わなかった。そのまま走れずにバタリと倒れた。

薄れゆく意識の中で俺はぼんやりと、しかし驚愕の事実を見た。

「仮面・・・ライダー・・・G3-X・・・？」俺の意識はそこで途絶えた。

目が覚めるとそこは香霖堂だった。

「!？」身を持ち出すように起きると身体に走ったのは激痛であった。

「おや、もう目が覚めたのかい？」霖之助は水が入ったグラスを

持ってきた。

「あれ？俺は・・・？」俺は疑問に思った。本当ならば俺をここに運んでくることは不可能だ。

何故ならば俺の行った先は俺しか知らないはず。俺がいた所は俺とG3-Xとグロンギしか知らないはず。

俺は恐る恐る聞いてみた。

「霖之助サン・・・もしかして助けてくれたのは・・・。アナタですか？」

霖之助サンは少し間をおく、と俺は思ったが案外速めにその答えを出した。

「ああ。僕だよ。あのG3-Xと言うのは便利だね。」といった。俺の疑念は確信に変わった。

この幻想卿にライダー系のシステムの一部が流れ込んできていることを、

その時俺は知らなかった。

この幻想卿に前例の無い「ライダーバトル」が始まってしまいうことを・・・。

次

回に続く？

紅蓮

俺はこの怪我をしたボロボロ（またの名をボドボドダア！とも言つ）になったこの身体を直してくれる人は

居ないだろうかと思った。と霖之助に聞いた。俺はぶっちゃけあの場所しかない。

と俺は踏んでいた。

「そうだね……。永遠亭かな……。」「ああやっぱり。俺は結局こうなるのかよ……。」

と思いつつ店内から出ようとしたが、霖之助はこう言った。

「そういえば君に合うかは知らないけどさっきの『Gトレーラー』の中に一台変なものが在ったよ。」「

「……。？」俺は霖之助に言うまま無縁塚に落ちていたと言つていたGトレーラーの中に入った。

少し青っぱい明かりが付いたトレーラーの中にあつたのは1台のバイクであつた。

名前は……。確か……。トライチェイサーだつたよな……。

霖之助はトライチェイサーのタンク部分を軽く2回叩いて言った。

「これを持つて行くと良いと僕は思ふんだ。」「俺はそういわれた瞬間少し考えた。

以下心の葛藤（笑）

どうするよ俺！無免許でノーヘルだぜ！ここは乗ったら絶対に事故る！

いや持てよここは幻想卿だ。法律の何もありはしないはず！それに俺は私有地でバギーに乗ったことがある！

（実話です）だから操作は大丈夫だ、問題ない。

いいいや待て俺はまだ中学生だっ！このままではイカン！

よし落ち着け。答えは1つだ……。落ち着いて言うのだ……。
よーし。

以上心の葛藤（0・002456秒間）

「じゃ貰います。」俺は葛藤を全てスルーしていった。それに続き「確かトライチェイサーのキーは特殊警棒じゃなかったですか？」と俺は言った。

「ああ、これの事ね。」霖之助はサツとその特殊警棒を取り出した。

このとき内心『この人、ほんとに持っているのかな』と思ったのはオジサンとみんなの秘密だぜ！

俺はハンドル部分に特殊警棒を差込み、スタンドを足でしまい、

クラッチを切り、アクセルを少し開け（この時、ギアはロー）

ゆっくりクラッチをつなぐ

半クラッチ状態になったところで、バイクが前進する。

バイ

ク初心者のためのライダー1年生講座参考

はずだった！何故か一向に前進しない！と思ったら、暗号、というよりトライチェイサーにはパスワードがあって

それを入れないと動かないことに電撃のように気が付いた！

俺は焦りながら五代雄介の誕生日を入れて再び同じ動作をした。

するとオフロード車特有の

音がしていつでも走れるようになった。俺はホッと息をつきエンジン音を霖之助に礼を言った

「霖之助サン！ありがとうございます！」と言うと霖之助は「あ気にしなくていいよ」と言った。

俺はアクセルをかけてそのままG・トレーラーを出た。

「やっぱり乗りやすいな、このバイクは・・・。」俺は呟いた。程よい加速に良くなるブレーキ、

そのままケータイを取り出した、そしてデータから地図を出した。

「えーつと・・・このまま真っ直ぐか・・・。」

・・・・・・受験生移動中・・・・・・

そろそろ竹が見えてきた。俺はバイクを止めて、
周りを見回した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

多分お約束のように迷ったのであろう。方向感覚が（あったモノ
ではないが・・・）狂っている気がした。

「やれやれ・・・。」俺はため息を付いてふと周りを見た。すると
笹に少し当たるような物音がした。

俺はまた例のグロンギだと思ったが、その考えは一瞬にして覆さ
れた。

そこに人影が居たからだ。そのシルエットはやはり東方好きな俺
にはすぐに、認識できた。

「・・・！藤原・・・藤原 妹紅だっ！」俺は驚きより嬉しさ
のほうが大きかった。

ようやくの東方女性キャラ！しかも俺の好みランキングにも上位
に入るキャラだっ！だが紳士な俺はいきなり

『モコたん ハアハア（笑）』などはしない！ちゃんと普通に話
しかけるさ！・・・多分。

「すいませんその麗しい女性よ。」俺は平常心を保ちながら言
ったはずだが少しおかしかったか？

すると妹紅は振り向いて驚いたように叫んだ、

「誰だお前は、まさか・・・お前も敵か！」といったので、俺は、

いや俺以外の人も言うであろう。

「ハア!?」と

「輝夜の追っ手だなっ！これ以上慧音や里の人々に迷惑はかけさせない！」

「いやっ、おれは違うぞっ！おれは・・・」

「とぼけるなっ！！お前を倒すのは今の私しかできない！」

なぐんか切羽詰った状況だよなっ！俺なんだよ！言われているのは！

すると妹紅はサッと何かを出した、俺はソレがすぐ分かった

「それは・・・『ギヤレンバツクル』じゃないか！」俺の言葉を無視して妹紅はバツクルにカテゴリーAの

『スタッグビートルアンデット』のカードを入れて腰に着けた、そして右手を力強く胸に当て、叫んだ

「変身！」

ターン アップ 機械音とともに目の前に光る幕の様な物が出てきた。ソレは妹紅に接近してくる。

そして妹紅の身体を通り抜けたと思うと、妹紅は仮面ライダーギヤレンへの変身を成功させていた。

「・・・やっべー！」俺は慌てて腹部の中心に手がざす。すると輝きとともに「アークル」が出現した。それと同時に

甲を下にした右拳を腰の横に構えた後に左腕を下ろしつつ左の拳で右拳を包むようにし押し下げ叫ぶ

「変身！」

と叫ぶ、掛け声とともに俺の身体は徐々にクウガとなり、そして完全にクウガと変身できた。

しかしまだ俺のクウガは「グローイングフォーム」だ。仮面ライダーギヤレンにも勝てないし、

ましてや中は妹紅なのだから俺に勝ち目はほとんどない。だが時

間を稼いで、誤解が解ければ万々歳だ。

「まってくれ！妹紅サン！」俺は必死に訴えかけた。まあ自分の命が関わる事だ、必死にならない方が可らしいさ。

「うるさい！！」妹紅は一喝して俺の問いかけを拒否した。ああ駄目だこりゃ、話なんぞ聞いてくれない、

妹紅はギャレンラウザー（銃のようなもの）を俺に撃ってきた。

まあクウガだし死にはしないと思うが、多少は痛い・・・気がする。

「うおおおおお！」気をとられている隙に妹紅は走りながらラウザーを乱射してきた

「いたたたっ！」さすがにまともに食らうと痛い！俺は苦し紛れに右ストレートを繰り出した！がしかし、

俺の拳は空を切った。妹紅は空中にジャンプしてまたラウザーを乱射してきた。カウンターの形になって、俺は背中から銃撃に

当たった事になる。このままではやられる！俺はそう思っただけの作戦に出た。着地した妹紅に後ろから

羽交い絞めをした。妹紅は見事に羽交い絞めにかかった。そのままの状態で俺は妹紅に話しかけた

「何で俺を狙ったんですかつ！」すると妹紅は「お前も輝夜の一味だろうっ！」続けて「輝夜も『変身』をしたからな！」

え？何だって？「どんな形でしたか？」俺は羽交い絞めは緩めずに言った。すると妹紅は「丸に線が二本だったよ！」

と言った。続けて「お前は輝夜の一味じゃないのか？」と言った。俺は羽交い絞めを解いて言った

「さっきから言ってるじゃないですか・・・。」といった。

*

*

お互い変身は解かずに話した。これまでのお互いの行動、そして俺が輝夜の一味でないことを、

そして今永遠亭周辺で輝夜がハバをきかしている事を。「大変ですね・・・。」俺は在り来たりだがそんな事しか言えなかった。

予想以上に酷い状況に。「アナタもね・・・。」妹紅は共感を持つように言った。俺が幻想入りしたことも、

『アークル』を着けなければ死んでいたことも。お互いにため息をはきそうだったがそのため息は

1人のライダーの乱入によって飲み込まれた。

仮面ライダーサイガ・・・「天」の名前を欲しいままにするライダー・・・。

それが俺たちの前に立っていた。燃える竹藪を背景にして・・・。
俺は言った「お前は・・・お前は何者だ!!」

t o b e C o n t i n u e . . . 。

紅蓮（後書き）

次回予告！

どうもクウガです。理由があつて今は名前が出せません。まあ今回の永遠亭騒動が収まればいえるかな？
んじゃまた会いましょう！

これって次回予告か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8223y/>

東方英雄伝

2011年11月24日15時47分発行